富田林市埋蔵文化財調査報告34

中野遺跡発掘調査概要Ⅵ

富田林税務署造築工事に伴う緊急調査

2003・2

富田林市教育委員会

はじめに

富田林市は、大阪府の南東部に位置し、南河内地域の中心都市として栄えてきました。この南河内の中心を流れる石川は、古くから多くの文化を育んできました。

ここに報告する中野遺跡は、富田林市の中央部に位置し、石川西岸の中位段丘上に立地する弥生時代から中世に至る複合遺跡です。弥生時代には、市域の北部に位置する喜志遺跡や南部に位置する甲田南遺跡と並ぶ石川中流域の拠点的な集落で、サヌカイト製石器の製作を行っていたこともわかっています。また、奈良時代以降、寺院を有する石川郡の政治的中心地であったと考えられています。

このたび、遺跡の西半部に当たる富田林税務署の増築工事が計画され、近畿地方整備局と協議のうえ、平成14年度に発掘調査を実施しました。その結果、中野遺跡の西半部の様相の一端を知ることができました。ここに、その調査成果を報告いたします。

最後になりましたが、発掘調査を実施するに当たり、ご指導・ご協力を賜りました方々に深く感謝申し上げます。今後とも、本市文化財行政への一層のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成15年２月

富田林市教育委員会

教育長　清　水　冨　夫

例　　言

1．本書は富田林税務署の増築工事に伴い富田林市教育委員会が平成14年度に緊急発掘調査を行った中野遺跡の調査概要である。

2．調査は富田林市教育委員会文化財保護課の横山成己が担当し、現地調査は平成14年５月28日に着手し、同年６月14日に終了した。

3．現地調査にあたっては今西淳、瀬戸直子の協力を得た。また内業調査にあたっては粟田薫、楠木理恵、瀬戸直子、前野美智子、山本節子の協力を得た。

4．現地写真撮影は横山成己が、遺構実測は瀬戸直子、今西淳、横山成己が、遺物実測は松本友美、横山成己が、製図は金行美智子、横山成己が行った。

5．本書の執筆は松本友美、横山成己が、編集は横山成己が行った。

6．本書で使用した方位は磁北を表示し、標高は東京湾標準海面値(T.P.)で表示した。また、土色、遺物の色調については小山・竹原編『新版標準土色帳』を使用した。

7．出土遺物および各種記録類は富田林市立埋蔵文化財センターで保管している。

8．平成元年度の中野遺跡の調査に関しては、松本友美、中辻亘に協力を得た。出土遺物および各種記録類は同様に富田林市立埋蔵文化財センターで保管している。

本 文 目 次

はじめに
例言
Ⅰ　位置と環境……1
Ⅱ　調査の方法と基本層序……3
Ⅲ　調査の成果……3
Ⅳ　近接地の過去の調査……4
Ⅵ　まとめ……11

挿 図 目 次

第1図　中野遺跡調査地分布図……2
第2図　2002年・1989年度調査地平面図……3
第3図　出土遺物……4
第4図　遺構平面図・断面図①……6
第6図　1989年度調査地平面図・断面図……8・9
第7図　各遺構出土土器……10

図 版 目 次

図版1（上）遺構面全景　東から
　　（下）落ち込み遺構1近景　北から
図版2　　1989年度調査区全景　上方から

Ⅰ　位置と環境（第１図）

中野遺跡は、市域のほぼ中央部に位置しており、中野町から若松町にかけて東西約1.1km、南北約0.9kmの範囲で広がっている。遺跡の立地状況は、富田林市内の中央を南北方向に流れる石川と羽曳野丘陵とに挟まれた中位段丘上に位置している。

本遺跡が周知されたのは、1892年に『人類学雑誌』に「河内に於ける石器の新発見地」として紹介されてからである。市内のほぼ中心部に当たることもあり、1970年代以降は開発に伴い幾度の発掘調査が重ねられてきた。その調査成果を簡潔にまとめてみると、国道旧170号線を境とする遺跡の東半部では、弥生時代中期の竪穴住居址群や甕棺墓、断面Ｖ字形の溝、古墳時代後期の埋没墳、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての掘立柱建物群、奈良時代から中世にかけての遺構などが検出されている（註１）。また、1987年から1989年にかけて大阪府教育委員会と本市教育委員会が行なった都市計画道路に伴う調査では、多量の瓦と共に塔心礎、礎石が出土しており、奈良時代以降に近隣に寺院が存在していたことを示唆している。

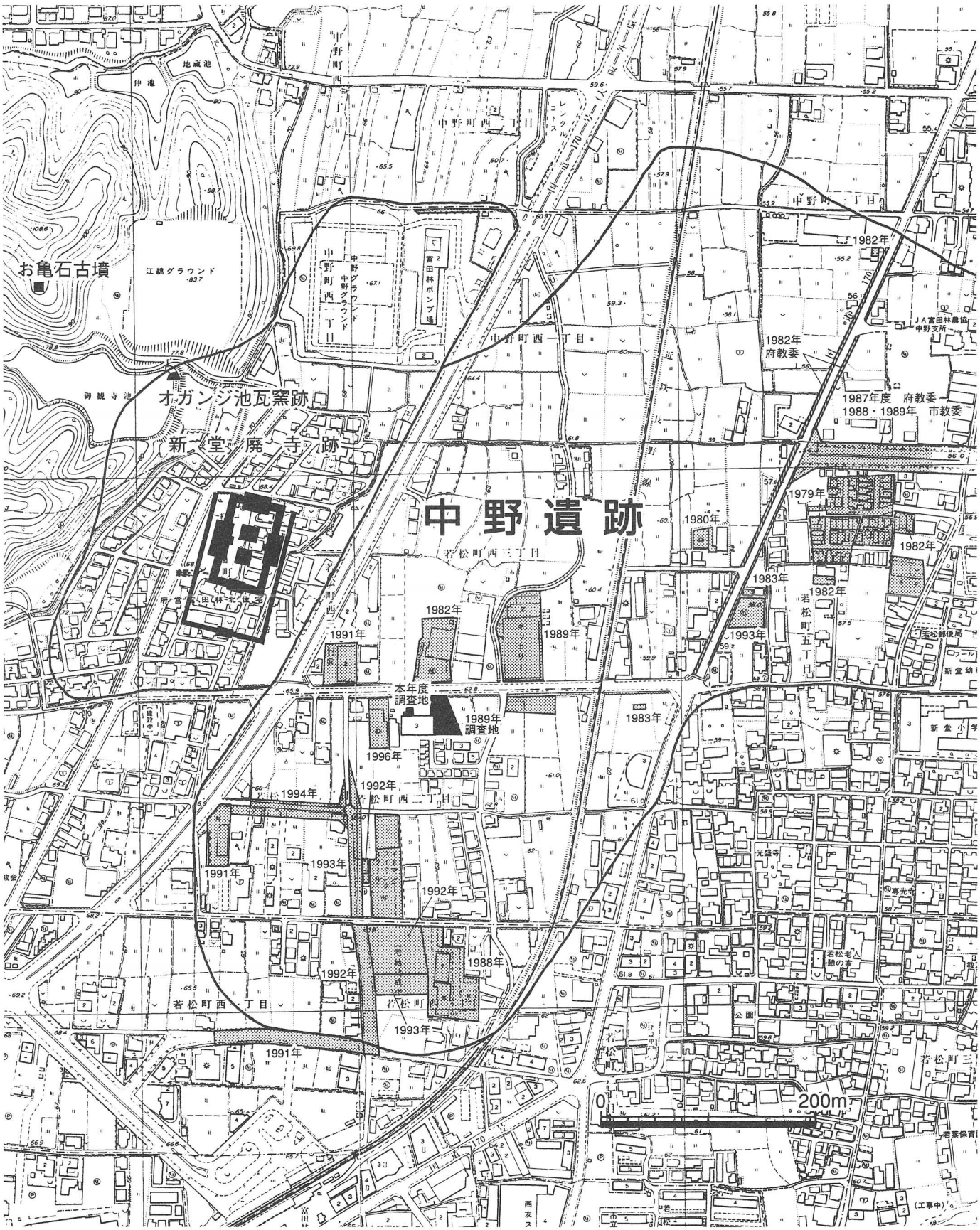
一方今回の調査地を含む遺跡の西半部では、弥生時代の遺物も若干出土しているものの、古墳時代から中世にかけての遺構が中心となっている。なお、今回の調査地東側に隣接する1989年度の調査地からは、飛鳥時代から奈良時代の遺物を伴う溝遺構、中世の鋤溝などが確認されている。遺跡の北西部には飛鳥時代に創建され、鎌倉時代までお堂として存続したと考えられる新堂廃寺が位置していることからも注目される地域である（註２）。

今回の調査は、富田林税務署の増築工事に伴うものであり、40㎡という限られた範囲で行ったものである。本書はその調査成果をまとめたものであるが、近隣地の調査として、前述した1989年度の調査（富田林税務署建物の増築工事に伴う調査）も同時に掲載しておく。

【註】

１）中村浩（1979），富田林市教育委員会（編）『中野遺跡発掘調査報告書』，富田林（大阪）
中辻亘・忍薫（1992），富田林市教育委員会（編）『中野遺跡発掘調査概要Ⅲ』（富田林市埋蔵文化財調査報告７），富田林（大阪）
玉井功（1982），大阪府教育委員会（編）『中野遺跡発掘調査概要－国道170号線歩道設置に伴う調査－』，大阪
田川友美（1995）「中野遺跡」，富田林市教育委員会（編）『平成６年度　富田林市内遺跡群発掘調査報告書』（富田林市埋蔵文化財調査報告26），富田林（大阪）

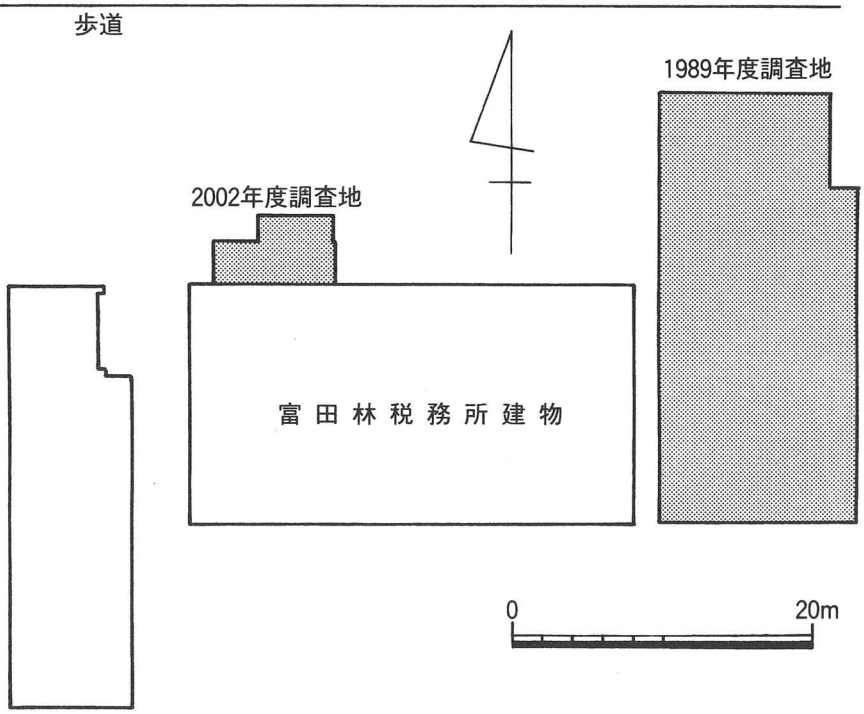
２）井西貴子（1997），大阪府教育委員会（編）『新堂廃寺発掘調査概要Ⅱ』，大阪
中辻亘・粟田薫（1999），富田林教育委員会（編）『平成10年度　富田林市内遺跡群発掘調査報告書』（富田林市埋蔵文化財調査報告30），富田林（大阪）
粟田薫（2000）「新堂廃寺」，富田林市教育委員会（編）『平成11年度　富田林市内遺跡群発掘調査報告書』（富田林市埋蔵文化財調査報告31），富田林（大阪）
粟田薫（2001），富田林市教育委員会（編）『平成12年度　富田林市内遺跡群発掘調査報告書』（富田林市埋蔵文化財調査報告32），富田林（大阪）
井西貴子他（2001），大阪府教育委員会（編）『新堂廃寺』（大阪府埋蔵文化財調査報告2001-1），大阪



第１図　中野遺跡調査地分布図（S=1/5000）

Ⅱ　調査の方法と基本層序（第２図）

今回の調査は、若松町西二丁目1697-1に所在する富田林税務署の造築工事に伴うものである。工事に先立ち、2001年５月28日に事前調査を行った。その結果、遺構が存在することが確認されたため、５月29日から現地調査を行うこととなった。



第２図　2002年・1989年度調査地平面図（S=1/500）

調査範囲は、税務署建物に北接して東西幅約14m、南北最大幅約７mのＬ字形の開発範囲全域、約40m²を対象とした。

基本層序は、第１層（盛土）、第２層～第４層（旧耕土）、第５層（旧床土）、地山（遺構面）であるが、旧耕土に関しては、調査区東側で約0.2mの段差をもって東側に下がっている。

発掘調査では基本層序第４層までを重機で掘削し、第５層以下を人力で掘削した。

Ⅲ　調査の成果

調査の結果、調査区の南側３分の１の範囲は現税務署建物の基礎工事によって撹乱を受けており、また東端部は近現代の耕作により撹乱を受けていた。しかしながら、調査区北側において東西方向に伸びる落ち込み遺構等を検出することができた。

１．遺構（第４・５図）

①落ち込み遺構１

調査区のほぼ中央部で、幅約7.75m、深さ0.1～0.2mの浅い落ち込み遺構が確認された。この落ち込みは、磁北に対して直交する東西方向に伸びていることが注目される。遺構の南側下場は東西に約12mの長さで検出されている。底面は、自然傾斜を反映して西から東に緩やかに傾斜しており、遺構西端部と東端部の高低差は約0.15mを測る。遺構内には、全面的に黒褐色弱粘質土が堆積していたが、遺構内掘削中に、足跡状の凹みが多数検出された（第４図）。

写真撮影・図化を行った後に遺構を完掘したところ、地山面にも足跡状の凹みが検出された（第５図）。したがって上下で２回検出を行ったことになるが、層位的に両者を上下面に分けることはできない。おそらく短期間に機能した遺構と考えられる。

これらの凹みを観察すると、ヒトの足跡と思われるもの、ウシ・シカなどの偶蹄類の足跡と思わ

れるものがある。また、平面形態が「U」字形であり、ウマなど奇蹄類の足跡のようなものもあるが、これは偶蹄類の前足跡と後足跡が重複しているためにこの様な形になったものと考えられる。

これらの足跡に関しては、1人または1頭の歩行単位・方向などを確認するには至っていない。しかしながら全体的な傾向としては、東西方向を向いている有蹄類の足跡が多いと言える。

②溝

落ち込み遺構1の北側堀方を共有する形で、東西方向の溝が検出された。底面は緩やかに東側に傾斜しているが、遺構内埋土は固く締まった粘質土であり、水流のあった明確な痕跡は残っていない。また、底面からはやはり足跡状の凹みが検出された。

この溝に関しては、検出状況から落ち込み遺構1に付随する施設と見なされる。

③落ち込み遺構2

調査区の北西角において、北西側に落ち込む遺構の南東側肩部を検出した。底面までの深さは0.2mであるが、全体の形状は調査範囲外に及ぶために不明である。

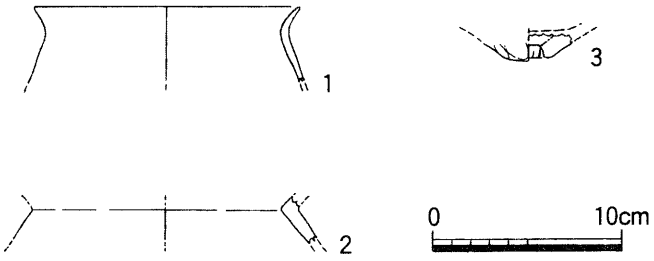
遺構内には、上層は落ち込み遺構1と同様の黒褐色弱粘質土が堆積しており、下層には溝埋土と同質の土が堆積している。

これらの遺構の性格、機能を考察すると、落ち込み遺構1は磁北に対して東西に直線的に伸びていることが注目される。検出当初は道としての機能が考えられたが、北側の落ち込み遺構2が同様の形態を取った場合、東西方向の長方形の田畑区画である可能性も払拭できない。しかしながら、遺構の底面が自然傾斜と同様に西から東に緩やかに降下していくことから考えて、水田遺構とするならば南北方向の畦施設が必要であろう。また落ち込み遺構1の北側に付随する溝施設の機能も今後の検討課題となるだろう。

2．出土遺物（第3図）

落ち込み遺構1からは、土師器片が少量出土している。すべて小片であり、器形が分かるものとしては、甕の口縁部片、高杯の杯部片が出土しているに過ぎない。所属時期に関しては限定できるものではない。

また第1層～第4層からは、須恵器片、土師器片、瓦器片などが出土している。



第3図　出土遺物（S=1/4）

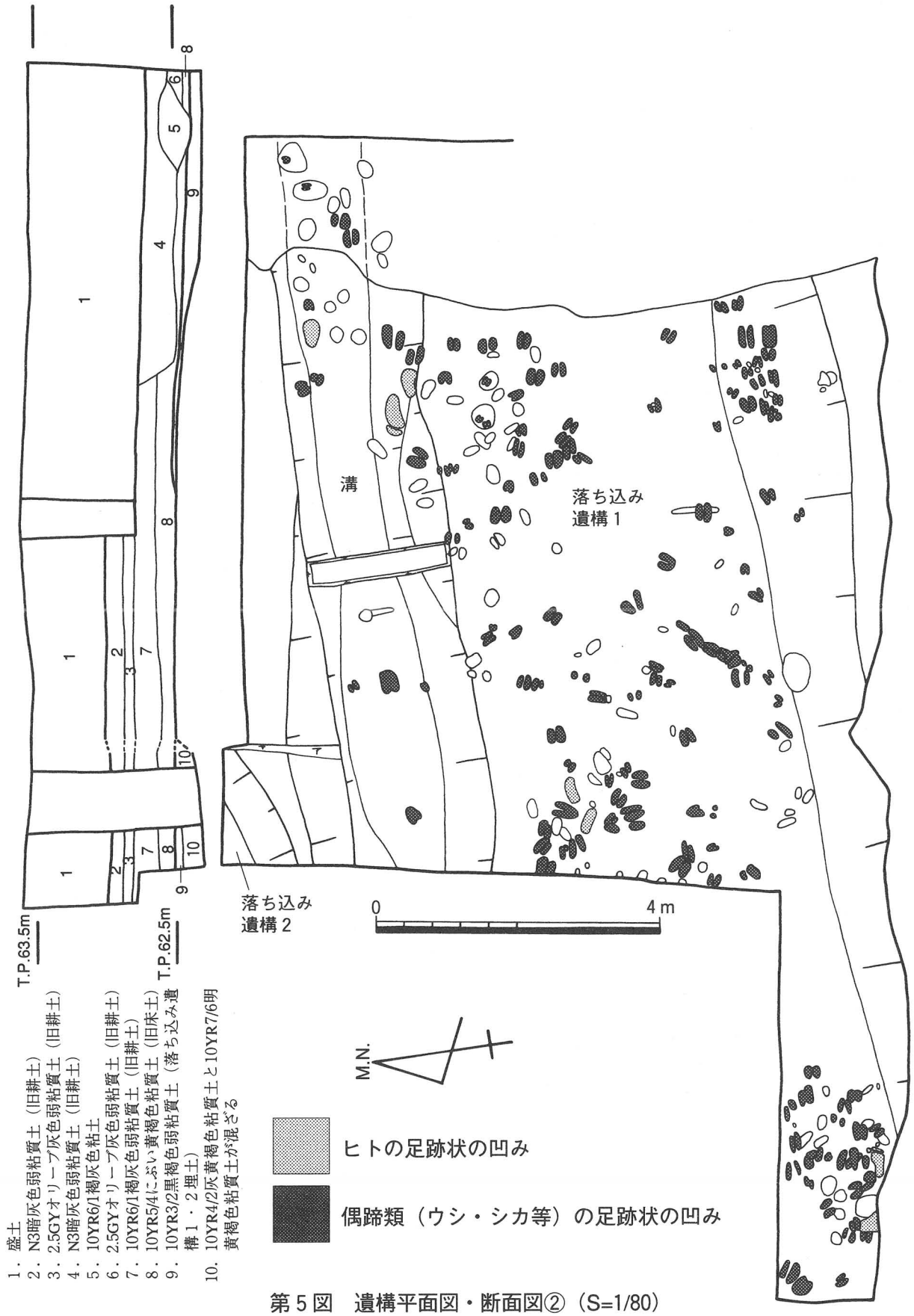
Ⅳ　近接地の過去の調査

ここでは、1989年度に行われた富田林税務署増築工事に伴う発掘調査の成果を紹介しておく。現地調査は、富田林教育委員会により1990年1月8日から3月31日にかけて行われた。

1．調査の方法と基本層序

調査区は、現在の富田林税務署の東側建物の範囲に該当し、調査面積は約600m²に及ぶ。西接する建物の基礎部分を除く基本層序は、第1層（盛土）、第2層～第6層（旧耕土及び旧床土）、第7

第４図　遺構平面図・断面図①（S=1/80）



第5図　遺構平面図・断面図②（S=1/80）

層～第13層（中世以降の堆積層）、第15層（中世遺構の形成面）、地山である。地形自体が南から北に傾斜しており、かつ西から東へ傾斜しているため、堆積は北東側がもっとも厚くなっているようである。調査区の南側では、旧床土の直下が地山となっている。調査は、上層遺構を検出後、できうる限り上層遺構を残して下層遺構を検出した。

2．調査の成果

1．遺構（第6図）

溝1～8は、第15層を遺構面とした東西方向の溝であり、鋤溝と考えられる。出土遺物は大半が小片である。溝1からは土師器、須恵器、黒色土器、瓦器片が、溝2からは土師器、須恵器、瓦が、溝3・溝4・溝7・溝8からは土師器、須恵器、瓦器が、溝6からは土師器、須恵器、黒色土器が出土している。

溝9は調査区の南端部にかかる溝であり、北側の肩部を検出した。遺構内からは遺物は出土していない。

溝10は南北方向の溝であり、東側を溝9に切られている。遺構内からは、須恵器、土師器が出土している。土師器杯の形態から、7世紀後半の遺構である可能性が高い。

溝11・12は調査区の北端部に位置する東西方向の溝である。両者は途中で合流している。溝11からは土師器片、須恵器片、平瓦、サヌカイトの剥片が、また溝12からは土師器片、須恵器片が出土している。

溝13は調査区のほぼ中央で検出された西北から東南に流れる溝である。土師器片が出土している。

溝14は調査区のほぼ2/3を占める東西方向の溝である。南の肩部は、溝10から北に約3ｍの距離にあり、北の肩部は調査区の北壁付近である。幅約16～26ｍで、深さは最深部で0.75ｍである。溝の中央から北の肩部にかけて、一段深く蛇行した溝が認められる。遺物としては、6世紀後半から8世紀中頃にかけての土師器、須恵器が出土している。

2．出土遺物（第7図）

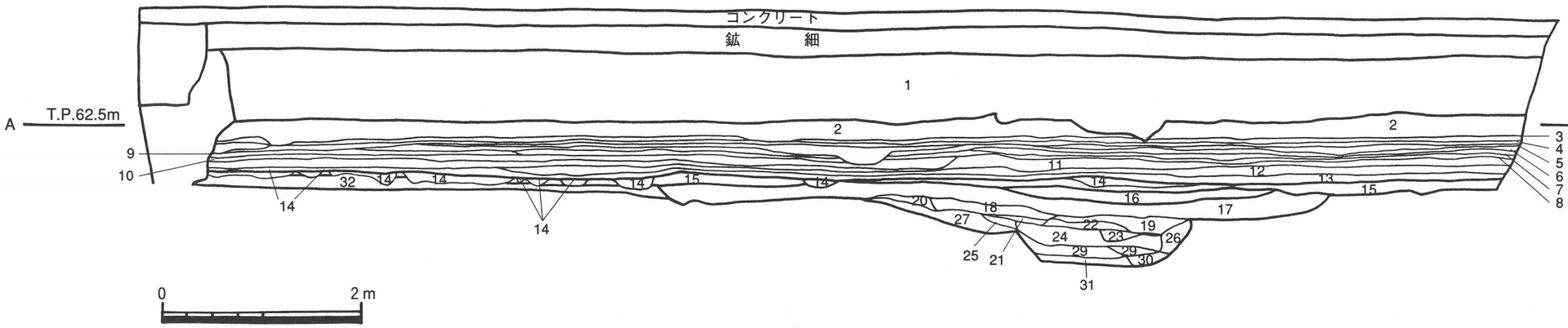
出土した遺物は、総量でコンテナ4箱分におよぶ。ここでは、遺構から出土した遺物を掲載する。

1は溝10出土の土師器杯。口径約11.6ｃｍ、残存器高2.85ｃｍ。口縁部は、平らな底部から内湾して立ち上がる。口縁端部は丸くおさまる。底部外面には指頭圧痕が残る。他はヨコナデ調整。胎土はやや良、色調は乳黄褐色。

2は溝6出土の土師器皿。口径約12.7ｃｍ、残存器高2.0ｃｍ。口縁部は、わずかに上げ底気味の底部から斜め上方に開く。口縁端部は丸くおさまる。口縁部内外面ヨコナデ調整、底部内面ナデ調整。底部外面には指頭圧痕が残る。胎土はやや良、色調は暗褐灰色。

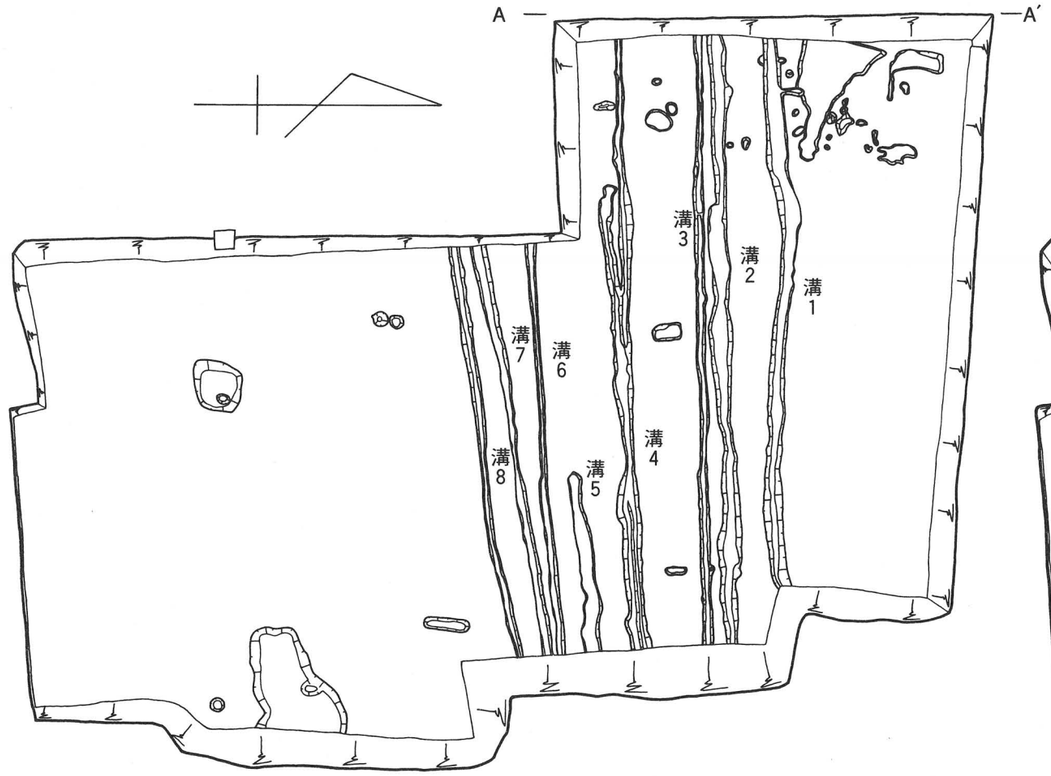
3は溝14出土の土師器高坏。口径約11.6ｃｍ、裾径約7.2ｃｍ、残存器高9.1ｃｍ。口縁部は、杯部からゆるやかなカーブを描いて開く。口縁端部は、丸くおさまる。脚柱部は、下外方に下り、裾部で大きく開く。脚柱部は中空。杯部と脚部の接合は、差し込み法による。杯部と脚部の接合部分に指頭圧痕が残る。脚柱部内面にかすかに絞り目が残る。他は、摩滅のため調整不明。胎土は良、色調は乳黄褐色。杯部外面に黒斑が認められる。

4は溝14出土の土師器釜。口径約21.2ｃｍ、鍔径約26.8ｃｍ、鍔幅3.4ｃｍ、残存器高6.7ｃｍ。

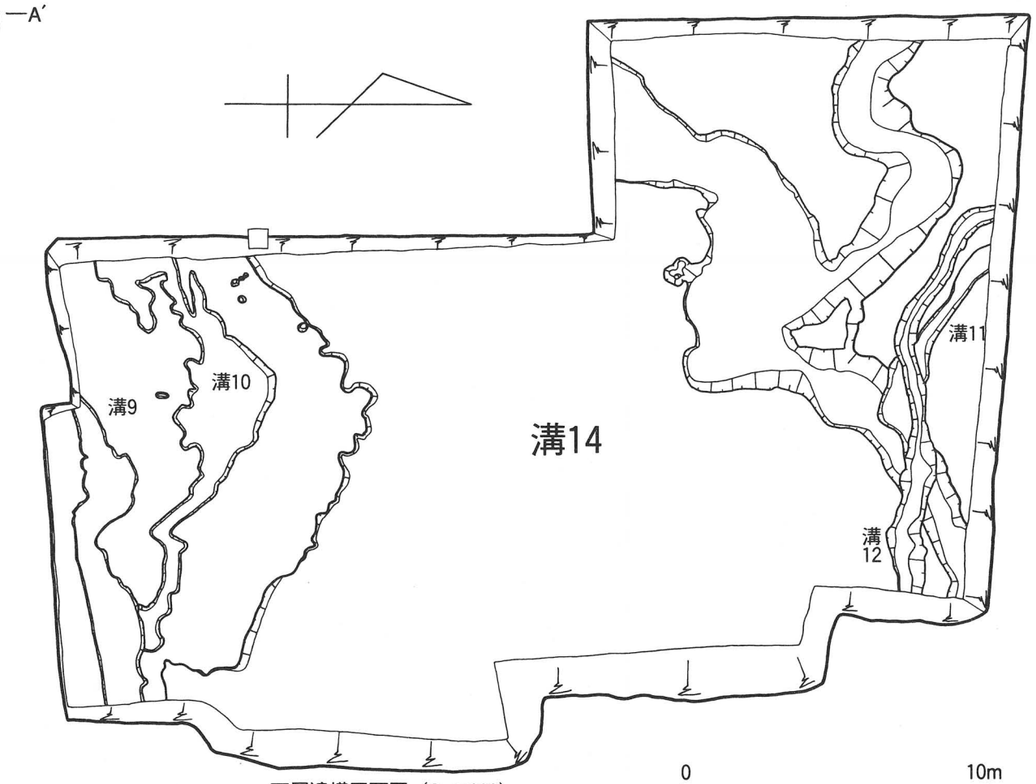


1．盛土
2．旧耕土
3．灰色土（旧耕土）
4．茶灰色粘質土（旧床土）
5．濁灰黄色土（旧耕土）
6．黄灰色弱粘質土（旧床土）
7．濁灰黄色土
8．黄灰褐色弱粘質土
9．灰青褐色弱粘質土
10．濁灰黄色弱粘質土
11．濁灰黄色粘質土
12．濁灰褐色粘質土
13．濁褐灰色粘質土
14．濁灰褐色粘質土～遺構埋土
15．暗黄灰褐色粘質土（中世遺構形成面）
16．暗黄褐色粘質土
17．黒褐色粘質土に黄灰色粘質土がブロック状に入る
18．暗灰褐色混砂質土に黄灰色粘質土がブロック状に入る
19．濁灰褐色混砂質土に黄灰色粘質土と黒褐色混砂粘質土がブロック状に入る
20．暗灰褐色混砂質土
21．黒灰褐色砂質土
22．濁灰褐色砂質土に黄灰色砂質土がブロック状に入る
23．黒灰色粘質土と黄灰色粘質土と灰青色粘質土が混ざる
24．黒灰色粘質土
25．暗褐色砂質土
26．濁灰褐色粘質土
27．濁灰黄褐色砂質土
28．黄灰青色砂
29．暗灰色砂質土
30．濁灰青黄色砂
31．濁灰青黄色砂質土
32．黄灰色粘質土に濁灰褐色粘質土がブロック状に入る

溝14埋土



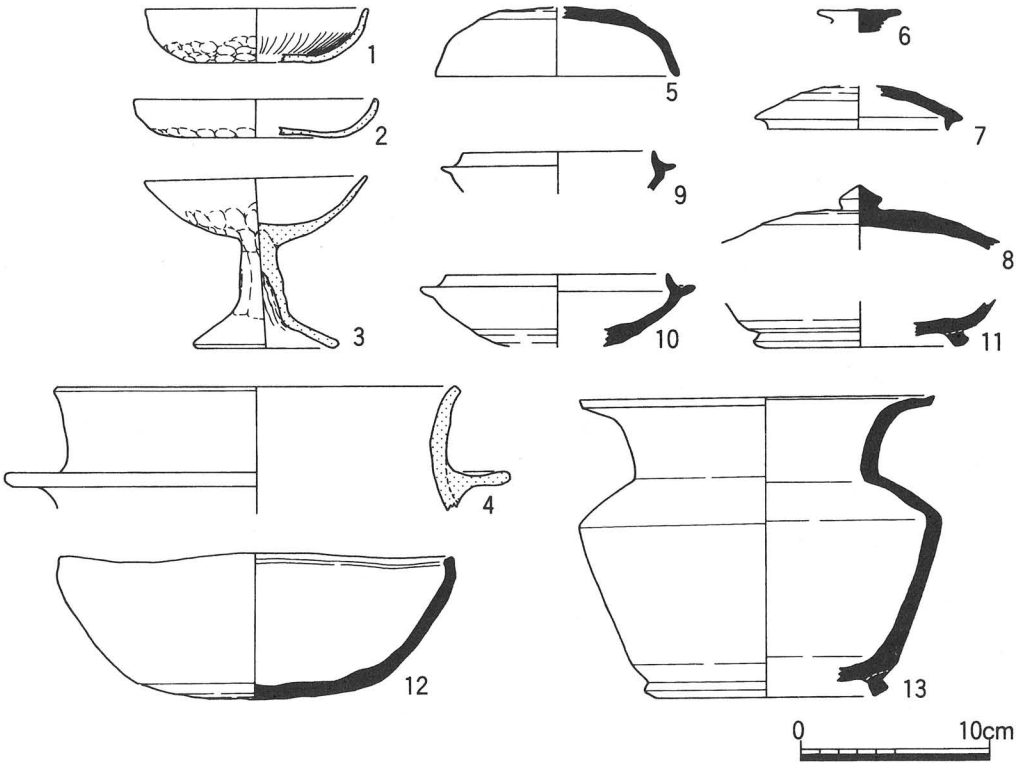
上層遺構平面図（S=1/200）



下層遺構平面図（S=1/200）

0　10m

第６図　1989年度調査地平面図（S=1/200）・断面図（S=1/500）



第７図　各遺構出土土器（S=1/4）

口頸部から鍔部が残る。口縁部は緩やかに外反する。口縁端部は外傾する面をもつ。鍔は張り付けであり水平にのびる。鍔端部はわずかに面をもつ。 胎土は粗く、角閃石を含んでおり、色調は明茶褐色。生駒西麓産と考えられる。

５は溝14出土の須恵器蓋杯の蓋。口径約12.8ｃｍ、残存器高3.65ｃｍ。口縁部はやや偏平な天井部から下外方に開く。口縁端部は丸くおさまる。天井部外面は回転ヘラ削り調整、内面は不定方向のナデ調整。他は、回転ナデ調整。胎土は密、色調は暗青灰色。焼成は良好。ロクロ回転は左。

６は溝２出土の須恵器蓋杯の蓋つまみ片。つまみ径約4.05ｃｍ、つまみ高0.6ｃｍ。偏平な宝珠つまみである。胎土は密、色調は青灰色。焼成は良好。

７は溝14出土の須恵器蓋杯の蓋。口径約10.8ｃｍ、かえり径約9.6ｃｍ、かえり高0.5ｃｍ、残存器高2.1ｃｍ。丸みをもつ天井部から緩やかにカーブを描いて口縁部に至る。口縁部内面にかえりをもつ。かえりは口縁部より下に突出する。天井部外面は回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整。胎土は密、色調は青灰色。焼成は良好。ロクロ回転は右。

８は溝14出土の須恵器蓋杯の蓋。つまみ径2.2ｃｍ、つまみ高1.4ｃｍ、残存器高3.4ｃｍ。天井部は丸みをもち、外面中央に偏平な擬宝珠つまみをもつ。天井部外面は回転ヘラ削り調整の後につまみ貼り付けのため一部回転ナデ。他は回転ナデ調整。胎土はやや粗、色調は淡灰色。焼成はやや軟質。

９は溝14出土の須恵器蓋杯の身。口径約10.1ｃｍ、受け部径12.4ｃｍ、たちあがり高0.75ｃｍ、残存器高2.1ｃｍ。たちあがりは短く内傾し、端部は尖り気味におさまる。受け部はほぼ水平にのび、端部は丸くおさまる。全体に回転ナデ調整。胎土は密、色調は青灰色。焼成は良。

10は溝14出土の須恵器蓋杯の身。口径約11.8ｃｍ、受け部径14.5ｃｍ、たちあがり高0.75ｃｍ、残存器高3.8ｃｍ。たちあがりは内傾し、端部は丸くおさまる。受け部はやや上向きに外方へのび、端部は丸くおさまる。底部は丸みをもつ。底部外面は回転ヘラ削り調整、内面は不定方向のナデ調整。他は回転ナデ調整。胎土はやや粗、色調は青灰色。焼成は良。ロクロ回転は右。

11は溝14出土の須恵器蓋杯の身。高台径約10.0ｃｍ、高台高0.6ｃｍ、残存器高2.35ｃｍ。体部は上外方にのびる。底部は平底。底部端よりやや内側にハの字形に開く高台をもつ。高台端部は内傾する面をもち、内側で接地する。体部外面は回転ヘラ削り調整、底部内面は不定方向のナデ調整、他は回転ナデ調整。高台は貼り付け。胎土はやや密、色調は淡青灰色。焼成は良。

12は溝14出土の須恵器鉢。口径20.7ｃｍ、器高7.7ｃｍ。丸底の底部から内湾して口縁部に至る。口縁端部は内傾する面をもつ。底部外面は回転ヘラ削り調整、他は回転ナデ調整。胎土はやや粗、色調は淡灰色。焼成は軟質。ロクロ回転は右。

13は溝14出土の須恵器広口壺。口径18.6ｃｍ、腹部径19.1ｃｍ、高台径11.6ｃｍ、器高15.9ｃｍ、高台高0.9ｃｍ。口径部は外反して大きく開き、口縁端部はわずかにつまみ上げるようにおさまる。肩部から下外方に下り、体部上半に最大径を有し、下内方に下る。底部は平底。底部端よりやや内側にハの字形に開く高台をもつ。高台端部は内傾する面をもち、内側で接地する。全体に回転ナデ調整。高台は貼り付け。胎土はやや密、色調は淡青灰色。焼成は良。

Ⅴ　まとめ

2002年度の調査では、東西方向に伸びる落ち込み遺構とそれに付随する溝施設、また多数の足跡が検出された。しかしながら、調査範囲が極めて限定されているため、遺構の性格を推定する際には慎重であらなくてはならない。また、出土遺物も貧弱であり、器形の判明する遺物から見ると古墳時代から飛鳥時代にかけての遺構である可能性が高いと言えるに過ぎない。

一方、1989年度の調査地を見てみると、下層で検出されている溝14が注目される。この溝は、調査記録によると幅16～26ｍの東西方向の溝となっているが、調査区北側の西壁断面図を見ると、溝14埋土（第６図の断面図第32層）を第17層が切り込む形で一段深い溝が形成されているようである。これが調査記録に残っている一段深く蛇行する溝という部分に該当するのであろうが、断面図からその形態を見てみると、2002年度調査の落ち込み遺構１と形態が類似していることが分かる。類似点を挙げると、埋土が共に黒褐色粘質土であること、また落ち込み遺構１に付随する溝施設と同様に、1989年度調査地の断面図にも幅約２ｍの断面台形の溝が確認されることである。ただし、この断面台形の溝は、2002年度の調査地では落ち込み遺構１の北側肩部に付随するのに対し、1989年度調査地では落ち込みの中央やや北側に位置している。

以上のことから考えると、2002年度の落ち込み遺構１と1989年度の「一段深く蛇行する溝」は同一の遺構である可能性が極めて高いと言える。この場合、この溝が蛇行しているという実情から見て、落ち込み遺構１も自然流路と見なさなくてはならない。

また、この流路の所属時期に関しては、溝14の出土遺物が参考になる（第７図３～13）。これらの遺物は６世紀後半から８世紀中頃に該当する遺物であるが、下限の一端が押さえられる資料13は調査記録によると調査区南側の西側側溝から出土した溝14出土品となっている。調査区南側では旧床土直下が地山となっている以上、この遺物は断面図で示されている第32層から出土したということになる。したがって、この第32層を切る落ち込み、第17層～第31層は８世紀中頃以降の流路と見なされる。

以上が1989年度、2002年度の中野遺跡の調査成果である。やや煩雑な内容となったが、今後の近隣地の調査でさらに検討していく余地があるものと考えている。

報告書抄録

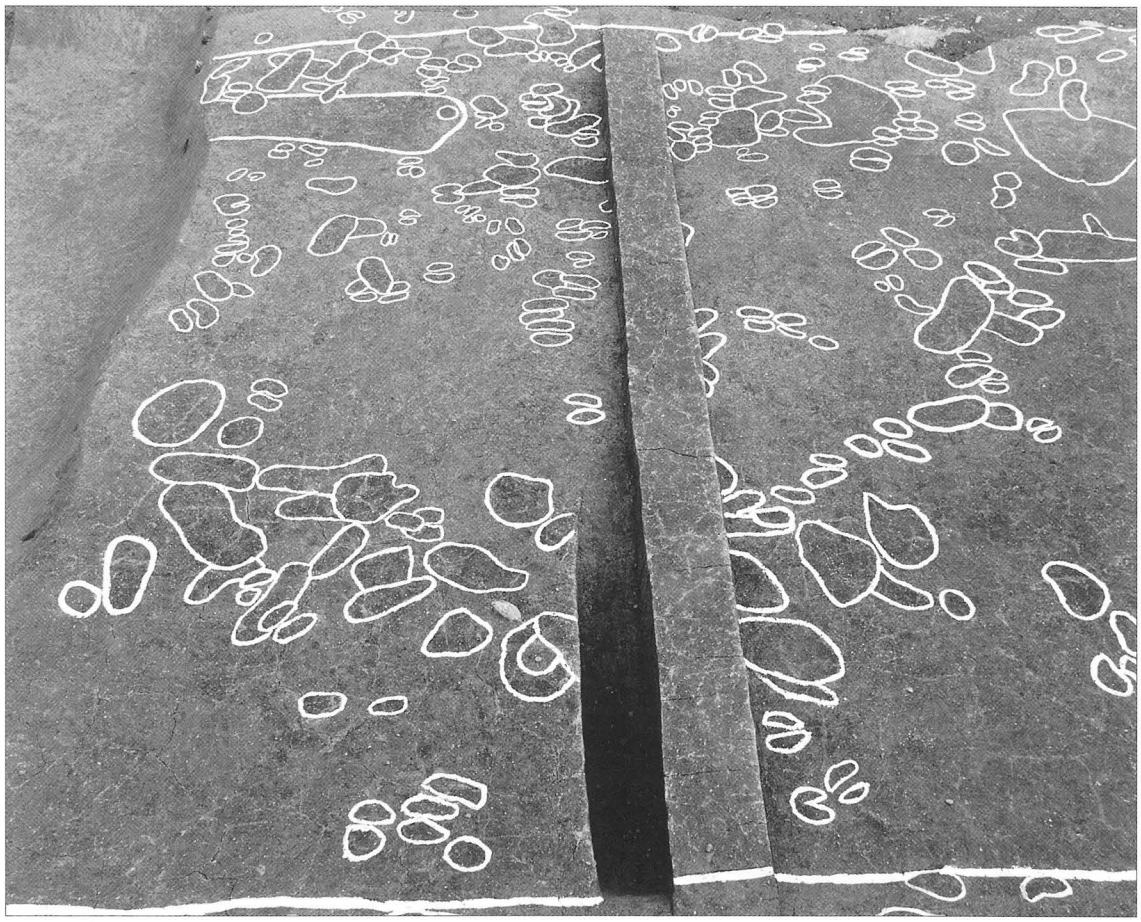
ふりがな	なかのいせきはっくつちょうさがいようVI
書名	中野遺跡発掘調査概要VI
副書名	富田林税務署造築工事に伴う緊急調査
巻次	
シリーズ名	富田林市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	34
編著者名	横山　成己
編集機関	富田林市教育委員会
所在地	〒584－8511 大阪府富田林市常盤町１番１号　☎0721－25－1000
発行年月日	西暦　２００２年２月２８日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 (m²)	調査原因
中野遺跡（なかのいせき）	富田林市（とんだばやしし） 若松町（わかまつちょう） 2丁目1697-1	27214	16	34° 30′ 17″	135° 36′ 20″	2002.5.28～ 2002.6.7	40	富田林税務署 増築工事

所収遺物	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中野遺跡	集落	古墳時代～ 平安時代	落ち込み・溝・ 足跡	土師器	

図　　版

遺構面全景　東から



落ち込み遺構１近景　北から

1989年度調査区全景　上方から

中野遺跡発掘調査概要Ⅵ

発行年月日　2003年２月28日
編集・発行　富田林市教育委員会
住　　所　富田林市常盤町１番１号
印　　刷　橋本印刷株式会社

2003．300